

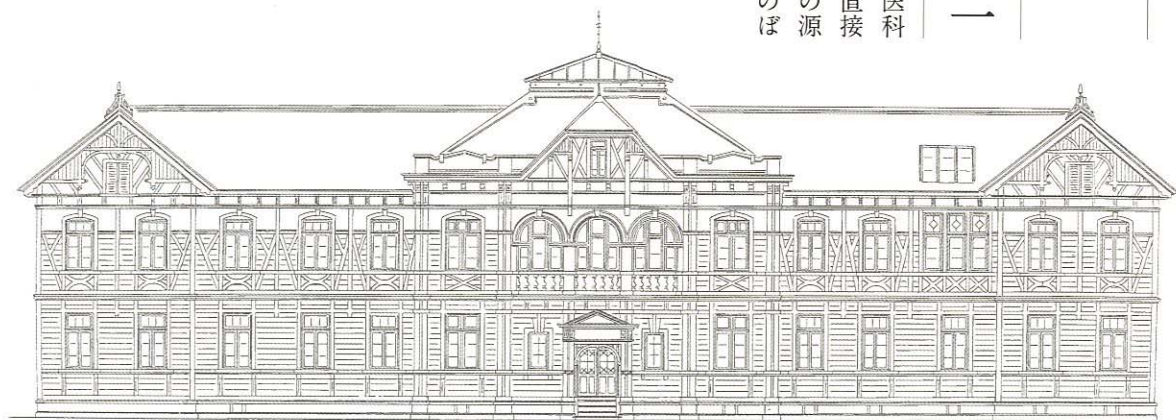


伊都地区ウエストゾーン

第1章 創立前史

一八六七—一九一一

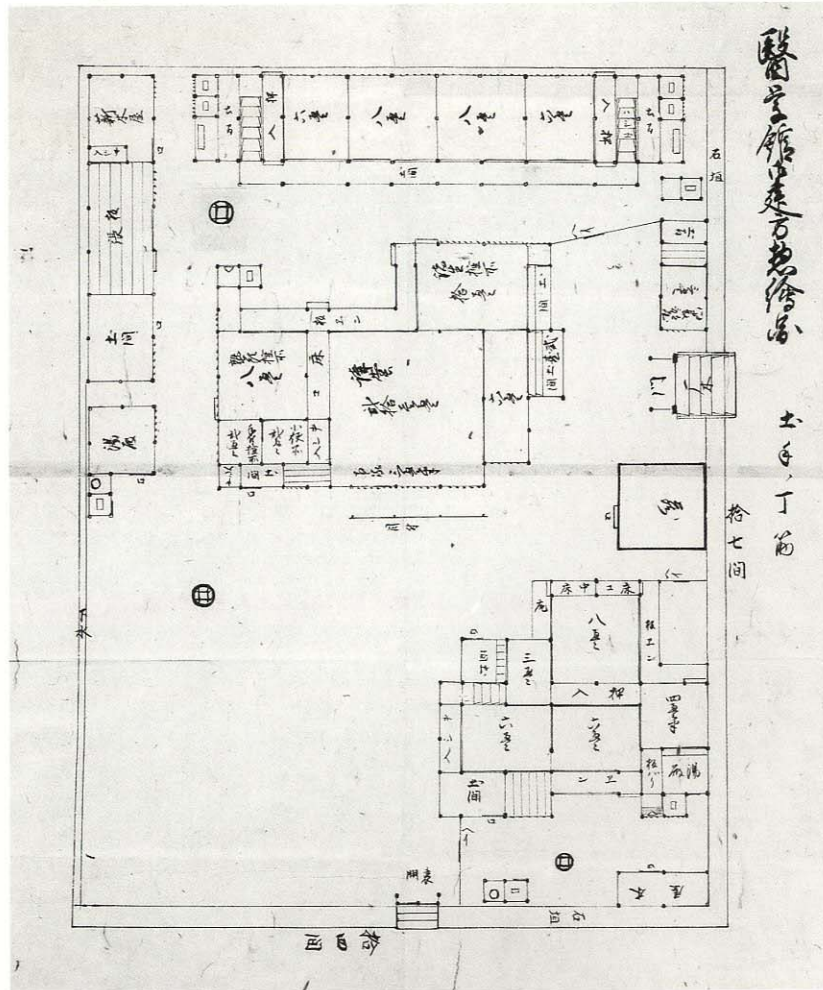
明治三六年（一九〇三）、他県との激しい誘致合戦の末、福岡に医科大学が創設された。この京都帝国大学福岡医科大学が九州大学の直接の前身であるが、その母体となったのは県立福岡病院であり、その源は慶応三年（一八六七）に設立された福岡藩の藩校養生館にさかのぼる。



1867-1911

福岡医科大学精神病学教室正面立面図

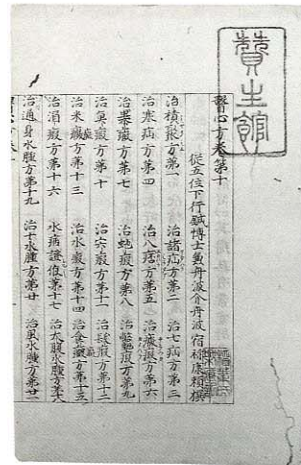
賛生館から県立福岡医院まで



1-001 医学館御建方惣絵図
土手ノ町濠端の福岡藩藩校賛生館の「御建方惣絵図」。



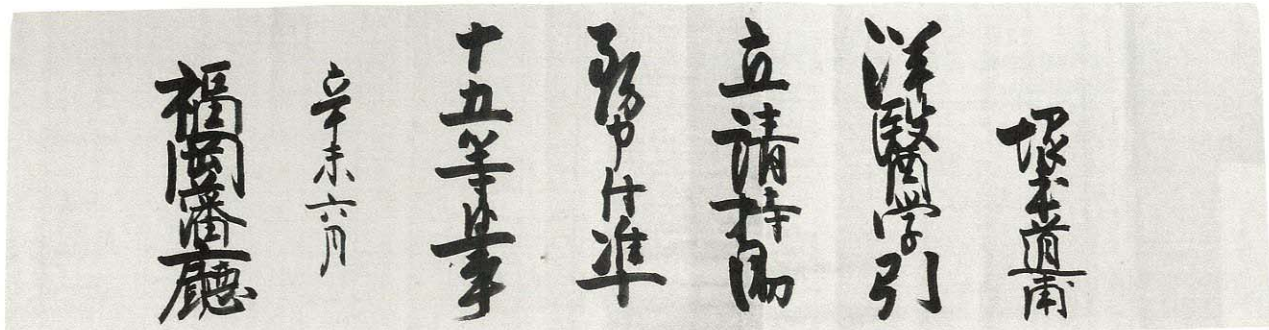
1-002 賛生館提挙(督学) 武谷祐之



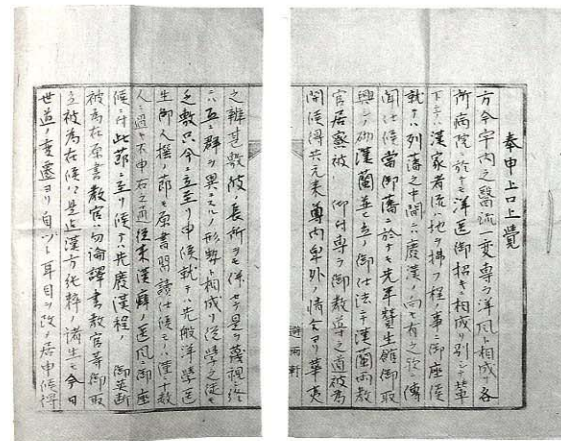
1-003 賛生館の蔵書印が捺された『医心方巻第十』



1-004 九州大学創立前史沿革図



1-005 「洋医学引立請持助務」任命書(明治4年)
福岡藩庁発給の塚本道甫宛任命書である。



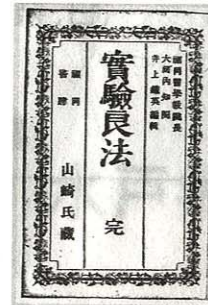
1-006 塚本道甫口上覚(明治4年)
明治4年、賛生館の塚本道甫らは同館の継続を要求して口上書を提出した。



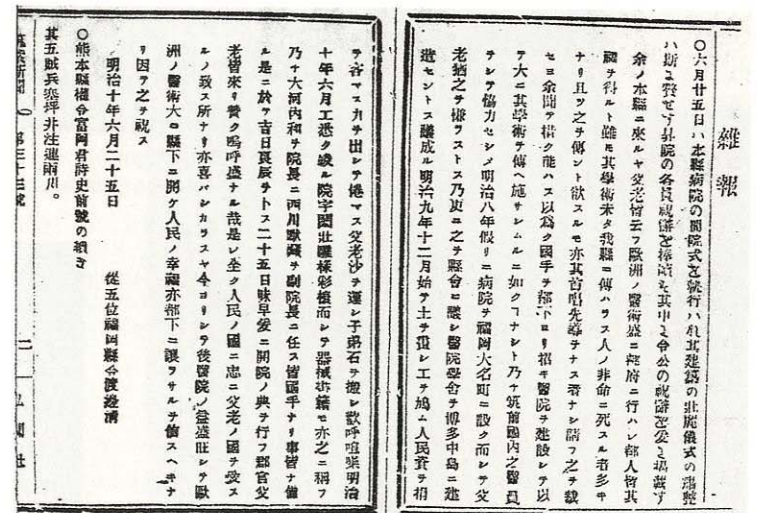
1-007 東学問所跡、修猷館跡の碑(福岡市中央区赤坂1丁目)
賛生館は廃館後、その機能の一部が修猷館内診察所に引き継がれた。



1-008 県立福岡医院長大河内和と彼の監修した医学書『実験良法』は大河内和と、井上鐵英編集の医学書である。



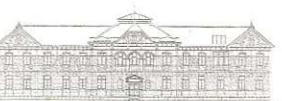
1-010 県立福岡医院本館
東中洲に建てられた県立福岡医院の本館である。



1-009 県立福岡医院の開院を報じる『筑紫新聞』(明治10年7月1日付)
明治10年6月25日、福岡県令渡辺清は新築された医院(病院)の開院式に臨み、祝辞を述べた。

福岡における西洋医学の組織的な教育・研究は、福岡藩主であった黒田長濤が幕末の慶応3年(1867)、福岡土手ノ町濠端に開設した藩校賛生館に始まる。同館は漢洋両方の医学を教えたが、同館の提挙(督学)は日田咸宜園の広瀬淡窓に儒学を、大坂適塾の緒方洪庵に西洋医学(蘭学)を学んだ武谷祐之。館員は塚本道甫、河島養林、原田水山等の医師であった。この賛生館は明治4年(1871)7月の廢藩置県後も福岡県の医療機関として存

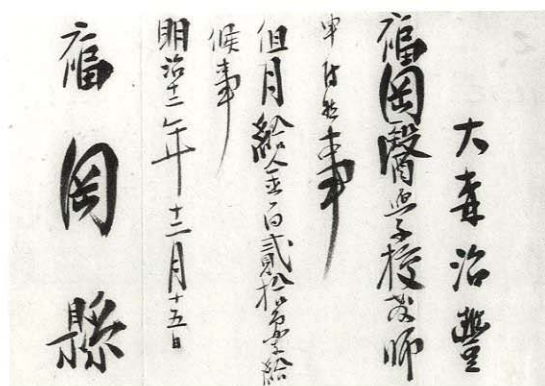
続していたが、5年9月の「学制」公布により廢館となった。塚本道甫らは同館の継続を強く望んだが、その願いは受け容れられなかった。以後、福岡の医育・医療機関は、修猷館内診察所(明治7年)、県立福岡医院(10年6月)と、場所と名前を変えながら続いた。東中洲の精錬所跡に移転した福岡医院の初代院長は、前年の明治9年、東京医学校を卒業した大河内和で、福岡に最初のドイツ医学を伝えた。



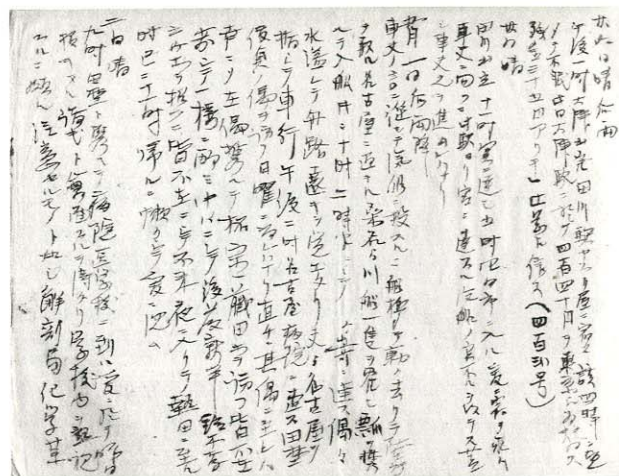
県立福岡医学校



1-011 錦絵に描かれた東中洲の県立福岡医学校 (明治20年)
中央に「病院」とあるのが福岡医学校の附属病院、上方には福岡県庁舎が見える。



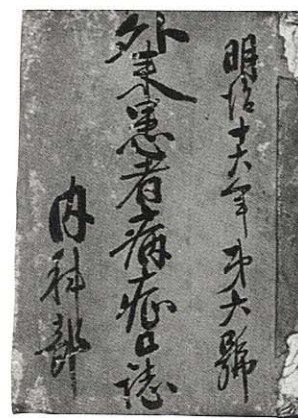
1-012 大森治豊宛福岡医学校教師任命の辞令 (明治12年)
福岡県による大森宛の辞令。月給金120円とある。



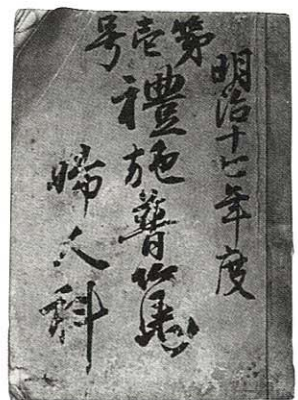
1-014 大森治豊の日記 (明治14年)
大森の「十四年東行ニ於ル何事不記」という表題の日記。同年5月1日と2日 (部分) の記事である。大森が名古屋病院、愛知医学校を見学した時の様子が記されている。



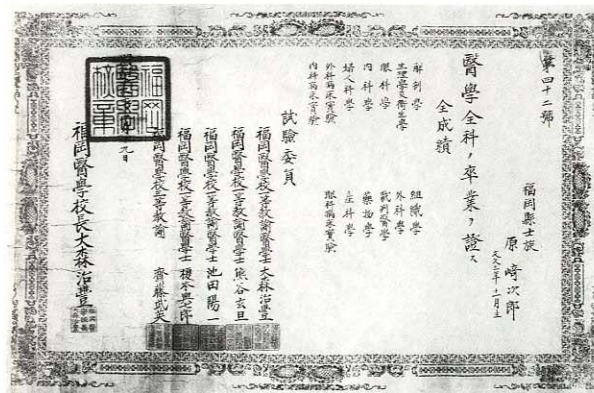
1-013 福岡医学校の教師たち
前列左2人目から柘植宗一、大森治豊、熊谷玄旦。



1-015 「外来患者病症日誌」 (明治16年)
福岡医学校附属病院内科部の外来患者病症日誌である。内科部の責任者は熊谷玄旦。福岡医学校では日常的に病症日誌を記していた。



1-017 婦人科レセプト (明治17年度)
福岡医学校附属病院婦人科のレセプト。上掲の「病症日誌」と同様のもので、医学・医学史研究の貴重な資料である。



1-018 福岡医学校卒業証書 (明治19年)
原崎次郎 (後、第13代原三信) 宛の卒業証書。



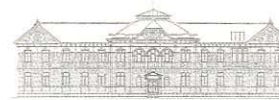
1-016 御雇外国人デーニツと県立福岡医学校の教師たち (明治18年)
東京医学校 (東京大学医学部の前身) に在職した後、佐賀病院・同医学校に務めたドイツ人御雇教師ヴィルヘルム・デーニツの来福に際し、彼に学んだ大森治豊や池田陽一らが接遇したときの写真。従来、写真階下に立つ人物はエルヴィン・ベルツと言われていたが、デーニツであることが判明している。階上左から大森、榎本與七郎、池田の各教師。



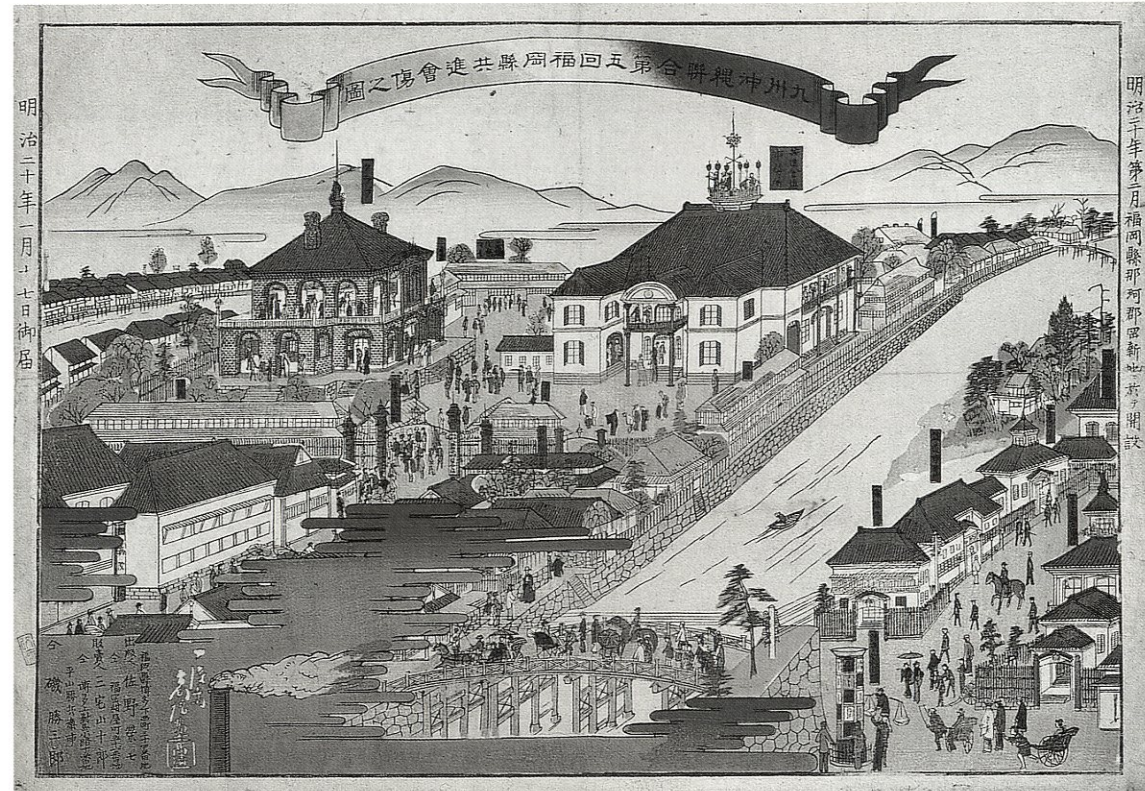
1-019 福岡医学校最後の卒業生と教師たち (明治21年)
於中洲共進館。前列右2人目から池田陽一 (産婦人科)、3人目大森治豊 (外科)、4人目熊谷玄旦 (内科)、5人目榎本與七郎 (眼科)。

明治12年 (1879) 7月、東中洲に移転開設した福岡医学校の地に県立福岡医学校が開校した。同校は明治12年10月に第1回生として東京大学医学部を卒業した18名の中から、大森治豊と熊谷玄旦という2名の医学士を招聘し、全国でも有数のスタッフを誇る学校となった。大森、熊谷という人物に注目すれば、後年の医科大学は直接的には福岡医学校にまで遡ることができる。同校は明治16年4月には卒業生が開業試験を免除される甲種医学校に認定され、翌年には薬学校を附置、さらに明治

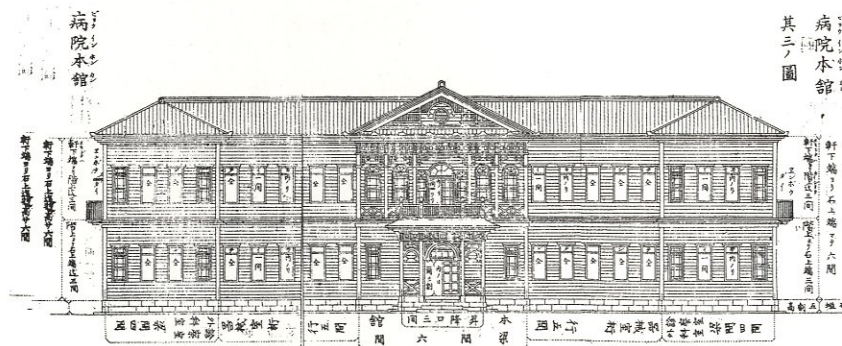
18年4月には、校長の大森らが帝王切開手術に成功して全国的な名声を博した。だがこのような活躍にもかかわらず、「民力休養」「地方税の均等的還付」の意見が多数を占めた福岡県会では医学校廃止論が根強く、また政府も医学教育を統一的、かつ集中的に行うとの観点から、明治21年 (1888) 以降は原則的に府県立医学校を廃止することにしたので、同校も明治21年3月に廃校となった。



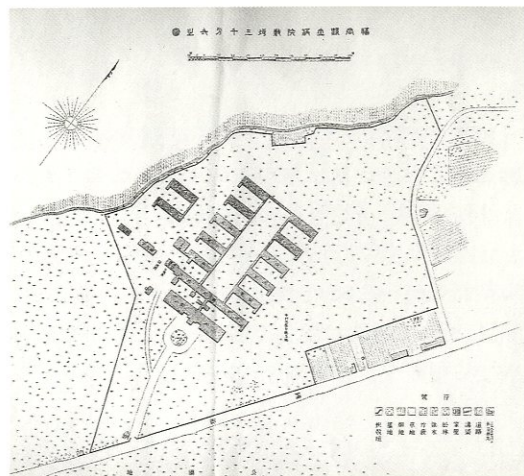
県立福岡病院



1-020「九州沖繩聯合第五回福岡県共進會場之圖」(明治20年)
左下の建物が県立福岡医学校の附属病院、中央下の橋が「病院橋」。同図は明治20年1月の制作であるが、附属病院が同年4月に改組されて県立福岡病院となる。



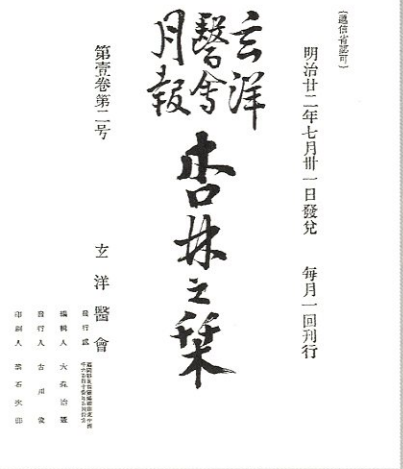
1-021 県立福岡病院本館正面立面図
県立福岡病院は明治29年、それまでの東中洲から現九州大学病院地区に移転した。同図は新築移転した病院本館の立面図(計画図)である。



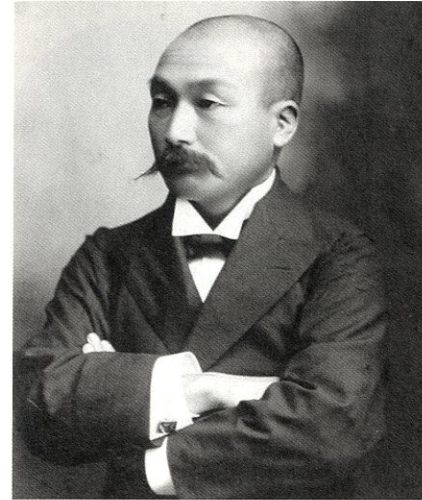
1-023 移転後の県立福岡病院建物平面図
現九州大学病院地区に移転した直後の平面図(敷地図)である。現在より狭小で上方が海に面しているなどの違いもあるが、大まかな形は現状に類似している。



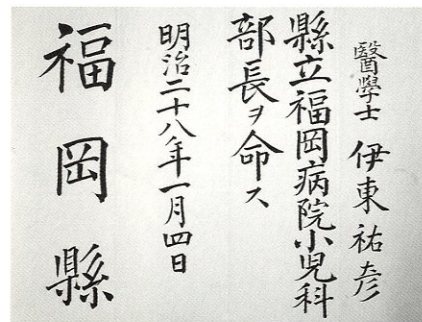
1-022 県立福岡病院本館



1-024「杏林之葉」第1巻第2号(明治22年7月)
明治22年6月、福岡県の医学界に「玄洋医会」が結成され、機関誌「杏林之葉」が刊行された。



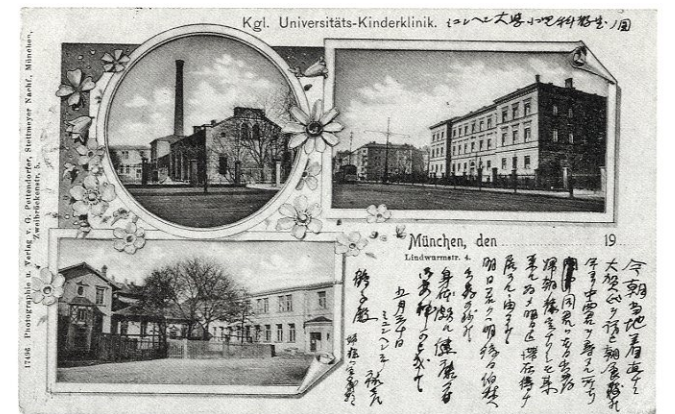
1-025 県立福岡病院小児科部長伊東祐彦
伊東は明治24年、帝国大学医科大学を卒業し、28年、小児科部長として県立福岡病院に赴任。後に京都帝国大学福岡医科大学小児科学講座の初代教授となり、以後も医科大学長、附属医院長等の要職を歴任した。



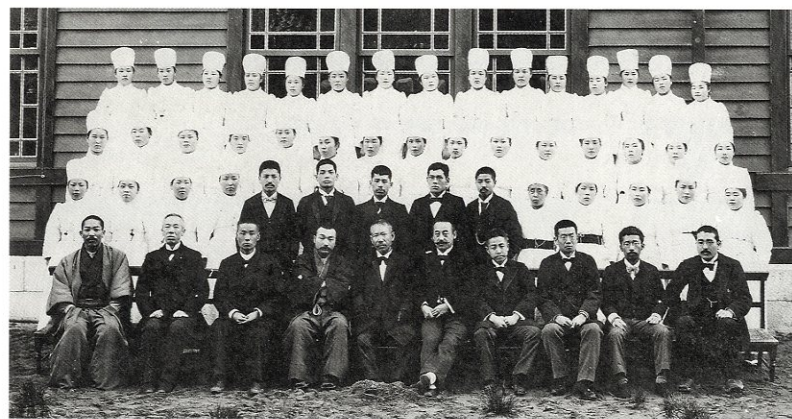
1-027 伊東祐彦宛 県立福岡病院小児科部長辞令(明治28年)



1-026 伊東祐彦宛伊東祐彦書状(明治28年12月8日付)
明治28年12月、県立福岡病院の新築が進む中、伊東は両親に宛てて書状を認めた。同書状には建築中の県立病院について「日本第一ノ大病院ニ御座候建物ノ大ナルノミナラズ其組織ノ完備」云々の記述が見え、同病院の規模を知ることができる。



1-028 伊東鶴子宛伊東祐彦絵葉書(明治34年5月30日付)
伊東は明治34年4月、ドイツのミュンヘン大学に留学した。この絵葉書は伊東が妻の鶴子に宛てた絵葉書のなかの一枚(ミュンヘン大学小児科教室)である。



1-029 県立福岡病院看護婦養成所第5回生記念写真(明治34年)
前列左から5人目大森治豊病院長(後、福岡医科大学長)、右隣は熊谷玄旦(後、福岡医科大学内科学教授)、左隣は伊東祐彦。

九州大学の淵源とも言うべき県立福岡医学校は廃校となったが、地方にとって医育・診療機関は不可欠の施設であり、福岡県は医学校を病院に改組して存続させることにした。こうして明治21年(1888)4月、旧福岡医学校附属病院を主体にした県立福岡病院が開院する。同病院の職員には医学校時代のスタッフが残り、前校長の大森治豊が院長に、同僚の熊谷玄旦が副院長に就任した。県立病院には折柄の九州鉄道の開通によって遠方の患者も多数訪れ、また、病院の医学士たちは、定期的に福岡

県下各郡を巡回して診療を行うと同時に、開業医たちの実地指導に当たった。開業医を玄洋医会という組織にまとめ、医学雑誌『杏林之葉』編集の中心となったのも同病院である。県立福岡病院はこうして地域の医療センターの役割を果たしていたが、医学校時代からの施設が老朽化し、明治29年(1896)6月、それまでの東中洲から筑紫郡千代村(現在の九大病院地区)に新築・移転した。

